

三十年前のメルボルンのパブで教わった事 駐在員の生活の一端 (1970~76年)

昭和30年卒 梶原俊久

今回の投稿にはラグビーの話は全くありません。少し関係あるとすれば、ラグビー発祥の地英国を宗主国とする英連邦 (Commonwealth of England) の一員であるオーストラリアのメルボルンに 35 年前六年間商社マンとして生活した時のお話である事と、ラグビー仲間の山本清孝君、矢野浩君 (共に 34 年卒) が八重洲に開いている極めて本物のパブに近い佇まい (Atmosphere) のランズダウンロードにも若干話しが通じるかなと云う位の所でしょうか。

いわゆる商社マンとして 43 年間勤めました。この間豪州メルボルン、米国ニューヨーク、泰国バンコックと三度、通算十三年間の駐在員生活を送りました。戦後廿五年を経て当時の日本の国力、経済力が急速に立ち上がって来た頃の 1970 年~76 年に駐在した、豪州メルボルンでの、今から三十年ほど前の駐在員生活での数々の経験の中から、お酒の飲み方に就きメモって見ました。

豪州はご承知の通り英連邦の一員で、元々英国からの移民 (自由移民と同時に政治犯、一般犯罪者、娼婦も送られた) の国で、その日常生活は英国のそれを踏襲するものであり、酒場パブリックバー (通称パブ) もその例外ではなかった。

さて当時の日豪関係は、銅鉱石等の非鉄金属鉱石、日本向けを目指して大規模に開発された鉄鉱石、石炭、砂糖等々の日本向け輸出が緒につき、その関係は急速に良くなっていたが、小生が赴任した時期でもホワイトオーストラリア (白豪主義) が未だ根強く残っていた。その二~三年前迄は、特に戦時中の日本軍による捕虜虐待に対する反感の影響が残っており、日本人は必ずしも歓迎されず、床屋に行くにも豪州人の友人と一緒にいかねば頭を刈ってくれないとか、又、“ANZACDAY” (豪州ニュージーランド在郷軍人会の日) のパレードの時に日本人は外に出ぬ様に注意されていた。

当時の在メルボルン日本人は家族を含めても五百人程度であった。この様な環境でも、パブの好きな豪州人との昼食時、仕事帰りに毎日のようにパブに通い、豪州なまりの英語 (パブでの通常会話は英語の冗談の云い合い) の習得に励んだ。そのころの思い出を書きました。

◇オーストラリアのパブとビール

豪州人はとにかくビールが好きで、街の中には必ずパブがあり、昼食時、夕方にはカウンターに向かい大勢の人が立ち飲みを続けている。とにかくトイレにも行かずに飲む量は日本人には理解と想像の範囲外である。当時のパブのライセンスは時間制で、朝早くから仕事があり人の集まる地域、例えば港湾荷役場とか市場等では朝四時頃から開いており、十二時には閉まってしまう。即ち一日八時間の営業ライセンスである。街中では十四時~二十二時という具合に、その土地、場所によって客の集まる時間帯に営業していた。初めは早朝から開いているパブに奇異な感じがしたが、考えて見れば極めて実質的

で便利なやり方だと感心したものだ。

◇パブに於けるビールの飲み方の作法

例えば四人でパブに行くと、先ず一人がシャウト (叫ぶ?) して四人分のビールを買い、一わたり飲み干すと次の人がシャウトして四人分の金を払い、これを繰り返す。最後の順番になって自分が飲めなくなった場合、自分の分を注文せずに三人分のみ支払う事は許されない。大変失礼になるらしい。従って自分があまり飲めぬ場合は、先ず最初にシャウトして四人分を払い三ラウンド目にもう飲めぬ場合には三番目の人のシャウトを辞退する事は許される。パブで飲む時は、とにかく早めにシャウトをしておかねばとても豪州人の飲みぶりについて行けず、その上一人だけ何日もトイレに行くはめになってしまう。

◇パブに入ってグッズを逆さに伏せぬ事

日本では、もうさすがに飲めません、私はもう充分ですと云ってグラスを伏せる事がよくあるが、パブでこれをやると、そのパブに居る人誰からでも喧嘩を買うぞという挑戦のサインになる。酒飲みの作法とは言え、知らぬとんでもない事になる。ご用心。

◇田舎のパブで出合った事

日本のハムメーカー信州ハムの方と牧場買収地探しで、メルボルンの田舎の村 (ライオネルローズというボクシング世界チャンピオンの出身の村) に行った時、丁度昼時となりパブに入った。そこに年の頃三十五才位の一人の豪州人の先客が居り何となく話をしていると、その人は、私は日本に居た事があると云いだした。当然ビジネスと思い、日本のどこかとたずねると仙台に居たという。日本には良い印象を持っている様な話し振りなので、何の仕事だったかと聞くと、私はガバメントゲストだったとの答が返ってきた。更にガバメントゲストと云うからには外交官かと重ねて聞くと、仙台の捕虜収容所に入っていたとの話だったので、これには驚かされた。つい数年前までは、必ずしも対日感情が良くない時代であったので、これはまずい事になったと思ったが、仙台の収容所では捕虜に対する対応がそれ程悪くなかった様で、彼の口から日本は良かったと云ってくれたのには助かり、ほっとして早々にパブから引上げた、という様な事もあった。

◇パブでも最後の一杯

酒飲みは、えてして切り上げ時が難しく、もう一杯もう一杯が続くのが洋の東西を問わず共通の感覚だと思う。パブでの最後の一杯の言い方にもなかなか含蓄があるというか面白い表現がある。山本、矢野両君のパブの壁にも書かれている言葉を最後に並べておきます。

ONE FOR THE ROAD

(帰路に!)

ONE FOR THE SPUR

(愛馬と共に帰る拍車に!)

ONE FOR THE DITCH

(酔っ払って落っこちる排水溝に!)